

# 南恩加島小の16人

## 電子紙芝居で記憶

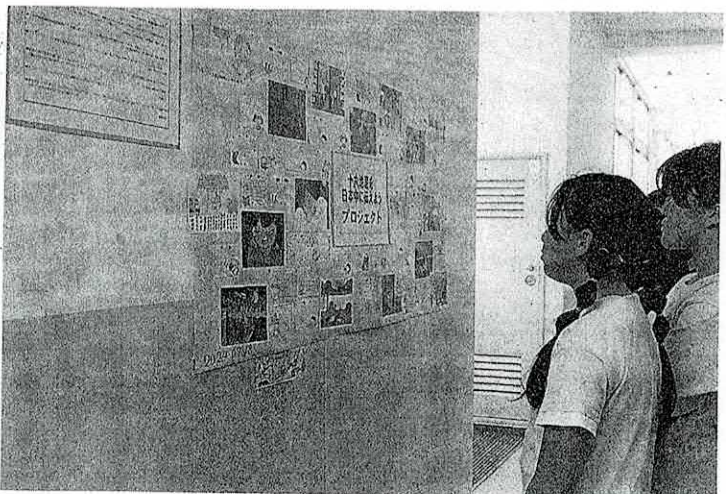
学校HPで公開

太平洋戦争中に集団疎開先の火災で児童16人が死亡した大阪市立南恩加島小学校（大正区南恩加島3）で、6年生児童がこの惨事を伝える電子紙芝居をつくり、学校のホームページで公開している。

火災は1945年1月29日夜に、3年生男児が泊まっていた徳島県貞光町（現つるぎ町）の真光寺で起きた。同小学校の前身、南恩加島国民学校の児童は44年9月から集団疎開し、寺院などに分宿していた。火災の日は、教師の会議が別の宿舎であり、住職も出かけて子どもだけだった。火は本堂まで燃え広がり、児童29人中16人が亡くなる惨事となった。

24年は初めてインターネット中継をした。電子紙芝居は、ピースおおさか（大阪国際平和センター）が製作したアニメ映画「学童疎開 十六地藏物語」や原田一美さんの絵本

「十六地藏物語」を参考に6年生（計41人）が修学旅行後につくった。児童数人で一場面の絵を描き、音読した。疎開した児童の日常も描かれた。心待ちにした面会を喜ぶ子の中



廊下の紙芝居の掲示を見る子どもたち

大阪府大正区の市立南恩加島小学校で

同小学校は運動場にモニュメントをつくり、各学年に応じて事実を語り継ぎ、平和教育を実施。6年生は修学旅行でつるぎ町の真光寺や同町立真光小学校を訪れ、地元の人たちと交流を続けている。1月29日には南恩加島小学校と真光寺で追悼行事があり、20

で、保護者が会いに来られない子が涙を流す場面を描いた坂下柚希さんは「かわいそう、と気持ちを想像して描いた」という。火事で焼け出された子らを描いた竹林大輝さんは「心が痛む様子を表現するため、背景の色を何度も塗り直した」と話す。

朝鮮半島出身の子どもたちも犠牲になり、「アイゴウ」と泣く教師を迫力満点の絵に表した鍋島心結さんは「先生はこれで朝鮮の人だとみんなに分かり、その後、差別されなかっただろうか」と心を寄せた。紙芝居は紛争状態にあるウクライナやパレスチナ自治区ガザにも触れ、子どもたちの平和への願いで締めくくられている。

【亀田早苗】